

メノンの問いとソクラテスの問い

田中 享英

■二つの問いの対立

対話篇『メノン』の冒頭は、プラトンの作品にしてはめずらしく唐突に、テッタリアからの客人メノンの、ソクラテスに対するつぎの問いから始まる。「ソクラテス、あなたはこういう問いに答えられますか。徳というものは教えることができるものか。それとも教えることはできず、実践によって身につくものか。あるいはそのどちらでもなくて、ただ生まれつきの素質によるものなのか。あるいはなにか他の仕方ですなわることか。」これに対してソクラテスは、メノンをちょっと冷やかした後で、答える。「それどころかぼくは、そもそも徳それ自体を、いったい何であるか知らないのだ。だから徳についてはまったく無知なわけで、そういう自分を恥ずかしく思っているのだ。というのも、何であるか（ティ・エステイン）知らないものについて、それがどのようなものであるか（ポイオン・ティ）をどうして知ることができようか。それともきみは、メノンをだれであるか全く知らない人が、メノンについて、美しいか、裕福であるか、品性高貴であるか、あるいはその反対であるかといったことを、知っているということがありうらうと思うかね。」

プラトンのこの唐突な書き出しは、もちろん意図的なものにちがいない。その意図とは、メノンの問いとソクラテスの問いの対立を、最初から鮮烈な形で提示しておこうという意図である。だがそれでは、その対立とはどのような対立か。またその対立にはどのような意味があるのか。われわれは『メノン』を全体として読み解くために、まずこの対立を考察の対象としよう。

『メノン』の導入部は、この対立の性格についてさらに一つのヒントを提供している。それは、メノンの問いを受けたソクラテスが、そのような問題を提出するメノンの知恵に驚いてみせる言葉の中にある。そこでかれは、ゴルギアスの教えを受けたテッタリアの人々の知恵(70b1, b4)と、ソクラテスに教えられたアテナイ人たちの知恵(70c4, 71a1)——というよりは無知——を、対比させている。すなわち前者は、どんな問いに対しても（したがってたとえばメノンが提出したような問いに対しても）「恐れることなく堂々と答える」(70b7, c3)ことができる知恵であり、後者は、徳そのものの何であるかを問い求めながら、それを「知る」(71a5-7, b3-8)ことができない、いわば知恵の早魃であるというのである。プラトンは、ソクラテスにこの評言を語らせることによって、メノンの問いが言論のかたちでの「答え」を求める問いであるのにたいして、ソクラテスの問いが（「徳」と言われるものの）実体を「知る」ことを求める問いであることを示唆していると思われる。（またこの導入部から、さらにわれわれは、この後の『メノン』の対話が、「知恵」あるいは「知る

こと」を主題として展開するであろうことをも予感する。しかもこの主題は、メノンの問いの中にあつた「教える」ことや、また「学ぶ」ことにも関わるものである。）

■「何であるか」の二義性

プラトンの『メノン』は、ふつう、かれの初期から中期への移行期の作品であるとされているが、そのことと、プラトンが『メノン』において、ソクラテスの問いをメノンの問いに対比させ、「何であるか（ティ・エスティン）」というソクラテスの問いの問題を正面から取り上げたこととは、ほとんど必然的なつながりがあるように思われる。というのは、プラトンの初期とは、簡単に言えばかれがソクラテスの対話を再現することを仕事とした時期であり、中期とは、そのように再現されたソクラテスを、今度はプラトンが自らの研究対象とし、ソクラテスが何をやっていたのかをプラトン自身の言葉で捉えることを試みた時期である。したがってもし『メノン』がその移行期のものであるなら、プラトンはまさにここで「ソクラテス」をあらためて探求の対象として自らの前に置き据えたことになる⁽¹⁾。となれば、かれがなによりもまず、「何であるか」の問いを考察の対象としたのは当然だろう。初期対話篇のソクラテスの対話を導いていたのが、まさにこの問いであつたからである。

だがそうなるところに早速、一つの問題が浮上する。それは、ソクラテスは、「何であるか」の問いによって何を求めていたのかという問題である。たとえば「勇氣とは何か」という問いによって、かれは何を問い求めたのか。もちろん、まずは安全な答えとして、「勇氣」の「何であるか」を問い求めていたのだという答えがありうるだろう。ではその「何であるか」とは何か。哲学史や哲学事典は、それは「定義」であつたと教えてくれる。だがそれでよいか。たしかにソクラテスは対話相手に、「勇氣」やその他の徳の定義を答えることを要求した。しかしそのとき、かれはそれを探求していたのだろうか。定義とは一種の説明であり、言論である。それはいわば、何かの影である。ソクラテスが探求していたのはむしろ、定義される本体、つまり「勇氣」そのものであつたと言ふべきだろう。言い換えればかれは、「勇氣」と呼ばれるものの実体を知ろうとしていたと言わなければならない。

ではなぜかれは対話相手に、「定義」を語ることを要求したのか。それは、対話相手の無知を——そして同時にソクラテス自身の無知を——言論を通して明らかにするためである。われわれはふつう、「勇氣」と呼ばれるものやその他の徳について、その実体は何であるかを知っていると思っている。だがもし本当に知っているなら、それを説明できるはずであ

(1) 『メノン』において「ソクラテス」があらためてプラトンの考察の対象となっていることは、(1)「何であるか」という問いの形式をとりあげて考察の対象としていること、(2) ソクラテスを「シビレエイ」と呼び、アポリアに導くかれの論駁法の意味を考察していること、(3) ソクラテスの論駁的探求を「想起」と名付けて説明していること、(4) 想起実験の中で「無知の知」の有用性を示そうとしていること、(5) ソクラテスの方法を「前提仮設の方法」として提示していること、などに顕著に現われている。

る。つまりその言論を語れるはずである。そこでソクラテスは対話相手に、定義の言論を語ることがを要求した。そしてその言論を論駁し、相手の無知を証明したのである。つまり定義を語ることは吟味的手段だったのである。

したがって定義は探求の目標そのものではなく、そこで求められる知の対象ではない。というのも、もしソクラテスが定義を探求していたのだとすると、かれの探求は常に失敗していたことになってしまうだろう（なぜなら、かれの対話はいつもアポリアに陥り、定義には失敗していたからである）。そしてかれの探求によるかぎり、何も見えてこないし、知に近づくこともないことになろう。だがおそらく、実は、ソクラテスが「何であるか」の問いによって対話相手と共に探求していたものと、かれがこの同じ「何であるか」の問いによって相手に答えることを要求したものは、同じではなかったと言うべきだろう。言い換えれば、「何であるか」は二義的であって、一方ではそれは定義の言論にほかならないが、他方ではそれは言論ではなく、知の対象として探求される実体であると考えなければならぬと思われる。

『メノン』における、メノンの問いとソクラテスの問いの対立を、もしも、初めに述べたように、なんらかの言論を答えることを求める問いと、なんらかの実体を知ることがを求めるとの問いの違いとして理解しようとするなら、それはいま述べたこれらの問題に関わってゆくことが予想される。

■三対の対比

さてすでに見たとおり、プラトンは『メノン』の冒頭で、メノンの問いとソクラテスの問いを対立させ、これを三対の対比の形で表現した。すなわち、第一は、「徳」それ自体を「何であるか」知らないのに、「徳は教えられるか、教えられないか、等々」を知ることができないという対比で、これは現にいまメノンが提出した問いと、ソクラテスがそれに対置した問いである。第二は、ある一つのものの「何であるか」を知らないのに「どのようなものであるか」を知っていることはありえないという対比で、これは上述のメノンとソクラテスの問いの対比を、一般的な定式のかたちに表現したものである。第三は、「メノン」を「だれであるか」知らない人が、「メノンが美しいか、裕福であるか、品性高貴であるか、あるいはそれらの反対であるか」を知っていることはありえないという対比で、これはいまの定式を、第一の対比とはまた別の具体例をもちいて解説し直したものと見ることができる。

この三対の対比は、プラトンが、メノンの問いとソクラテスの問いの対比を提示するにあたって、読者がそれを正確に理解できるように、可能な限り懇切丁寧に表現しようとしたものと見ることができる。では、かれの言おうとしたことは何か。

まずこの三対の対比が、同一の対比を語っていることは明らかだろう。そして、それがいずれも「知」の先後関係にかかわっていることも間違いなさそうである。ではそれは、何と何の対比で、何と何の先後関係か。われわれはいまそれを、第二の対比定式、すなわ

ち「何であるか」と「どのようなものであるか」の対比を基本に置いて見て行こう。プラトン自身も、『メノン』の全篇を通じてこの対比を定式として用いているからである⁽²⁾。

まず、「何であるか」と「どのようなものであるか」（あるいは「どのようなであるか」という二つの問いの表現を見ると、一見したところでは、前者は、なにか名詞による記述を答えとして要求し、後者は形容詞による記述を求めているように見受けられる。だがこの理解は、後者についてはある程度当たっているが、前者についてはおそらく誤っている。というのは、第一の対比において、メノンの問いの方は「徳は教えられるか、教えられないか、…」と（ギリシャ語では）形容詞を用いて問われており、またその答えも、たとえば「徳は教えられる」とか「徳は教えられない」というように、形容詞による記述を要求していたと見て、大体はよい。だがこれに対してソクラテスの方は、メノンが「徳は教えられるか」と問うたのに対して、自分はその「徳」というものを知らないと言ったのである。つまり「徳」という名称で呼ばれているものがあるらしいことは知っているが、その本体ないしは実体を知らないのである。となると、ソクラテスが問い求めていたものは、もちろん「徳である」という名称の記述でないことは言うまでもないが、かと言ってその他の名詞や形容詞による記述でもなく、さらにはおそらく、定義やその他の言論による説明でもなくて、それらとは区別される、「徳」そのものの——つまり実体の——「知」であったと見なければならぬように思われる。

というのは、プラトンがここで第三の対比を提示して見せたのは、まさにそのことを明確に示すためであったと思われるからである。すなわちそこでは、「メノン」を「誰であるか」全く知らない人が、「メノンは美しい」とか、「メノンは裕福である」とか、「メノンは品性高貴である」とかを知っていることはありえないと言われている。このときも、「メノン」を「誰であるか」知らないとは、その名前を知らないと言っているわけでもないことはいうまでもないが、さらに、その他のどんな記述を問うているわけでもなく、むしろごく普通の意味で、「メノン」に会ったことがなく、また付き合ったことがないことを意味していると理解しなければならないと思われる。つまりプラトンはここで、「何であるか」の知を、記述知ではなく、いま言われた意味での見知りによる直接知として語っているのである。そのことは、この対比において、かりに、「メノン」の「誰であるか」を何らかの記述あるいはその伝聞によって——たとえば人名辞典によって、あるいは定義によって——「知っている」という場合を考えてみれば明らかになる。というのは、その場合プラトンの第三対比は、「メノン」が（「誰であるか」を、つまり）「テッタリアの富裕な貴族」であることを知らなければ「メノンは富裕である」ことは知りえないというような、ナンセンスな同語反復を主張していることになってしまうだろうからである。つまりプラトンは、ここでソクラテスに第三対比を具体例として語らせることによって、「何であるか」を「知る」ことの意味と用法を間接的に規定していると見ることができる。

⁽²⁾ この対比定式は『メノン』の要所要所において、すなわちその第一部冒頭部分において、第二部の最初の「探求のパラドックス」の中で、また第三部の最初の方法論と最後の結びにおいて、提示されている。プラトンはこの対比定式を『メノン』全体を構成する枠組みとして用いている。

こうしてわれわれは、ソクラテスが「徳」の「何であるか」を「知らない」と言うとき、その意味は「徳」の「実体」がまだかれに「見えていない」ということであつたと、一応は理解してよいと思われる。したがって『メノン』において「何であるか」を問うソクラテスの問いは、そのような意味での、「知る」ことを求める探求の問いであつたと言えることができるだろう。

ただしこのことは、対話におけるソクラテスの「何であるか」の問いが、定義を要求したことを否定するものではない。ソクラテスは相手がたとえば「勇氣」に関係する付帯的なことをいろいろと述べ立てることはできても、その相手が当の「勇氣」そのもの（つまり「勇氣」と言われているものの実体）を知らないと思われたとき、この問いによってその定義を語ることを要求した。もしもかれがほんとうに「知っている」ならそれを「語る（説明する）」ことができるはずだからである。そういうわけで、定義の要求は相手の知のテストのための要求であり、一つの手段であつた。しかし他方、ソクラテスの対話の目的は「何であるか」の探求にあつた。このとき、問いの形は同じでも、かれが対話相手と共に探求していたのは「知る」ことであつて、これは「語る」ことと同じではなかつた。われわれがすでに見たように、「何であるか」は二義的だつたのである。

他方メノンの問いは、すでに「知っている」ものについて、それが「どのようなものであるか」を「語る」ことを要求する問いであると言えることができる。（『メノン』冒頭のメノンの問いは、直訳すれば「ソクラテス、あなたはこのことについて言うことができますか」というものであつた。おそらくメノンにとっては、「語ることができる」ということと、「知っている」ということは、同じことを意味したのであろう⁽³⁾。）このメノンの問いは、問いそれ自体としては何の不都合なところもない日常的な問いであると思われる。メノンはソクラテスが「徳」そのものを「知らない」などとは夢にも思っていなかつたから、「徳」についてそれが「教えられるか」を——つまり「どのようなものであるか」を——語ることを要求したのである。なぜならかれは「知っている」ものについては「語る」ことができると考えたからであり、この考えも、かならずしも間違つた考えではない。（われわれは、初期対話篇のソクラテスが、まさにこの考えに基づいて対話相手に定義を語ることを要求したことを思い出そう。）ソクラテスがメノンに答えることをいったん拒んだのは、かれが「徳」そのものを知らないという、メノンの予想を超えた、いわば普通ではない理由のためであつた。

■ソクラテスのアポリア

さて以上われわれは、『メノン』の冒頭部分について、メノンの問いとソクラテスの問い

⁽³⁾ メノンが、「語れる」ことをもっぱら重んじてきたらしいことは、さらに、前述の導入部（70b5-c3）のほか、「徳が何であるかを語ることに行き詰まることはありません」（72a1-2）、「これまで私は徳について、何回となく、いろいろとたくさんのかつことを、多くの人々の前で話してきましたし、しかも上手に話すことができたつもりでした」（80b2-3）などから窺われる。

の対立を見た。これによれば、ソクラテスの「何であるか」の問いは「知る」こと、ないしは「見る」ことを求め、メノンの「どのようなものであるか」の問いは「語る」ことを求めている。要するに、「何であるか」とは「知られるもの」のことであり、「どのようなものであるか」とは「語られるもの」のことであった。

ではプラトンはなぜ、初期対話篇の最後——あるいは中期対話篇の最初——に位置するこの対話篇において、この二つの問いを対比させ、区別することを必要と考えたのだろうか。その理由の一つはおそらく、初期対話篇のソクラテスの対話のアポリアの弁護というところにあったと思われる。

初期対話篇のソクラテスは対話相手に対して「何であるか」を問い、それへの答えとして相手が提出した定義（「何であるか」を「語る」もの）をすべて論駁し、相手をアポリアに陥らせて、自らの無知に気付かせた。このことについてわれわれが第一にはっきりと知らなければならないのは、ソクラテスが対話においてこれ以上のことは一切しなかったということである。つまりこれだけが、つねに、ソクラテスと対話相手の哲学探究のすべてであったということである。だがこのような哲学は、われわれの多くの者にとって、あまりにも厳しすぎるものに見えるのではないだろうか。というのは、ソクラテスと対話相手の哲学探究（「何であるか」を「知る」こと）はつねに失敗していたとしか見えないからである。だがそれは事実ではない。アポリアを知ることによって無知を知ることができたことが、そのまますでに、「知る」ことをあるかたちで実現しているのである。プラトンはこのことを明らかにするために『メノン』を書き、二つの問いを区別したのだと思われる。というのは、プラトンが『メノン』において明らかにしたのは、「何であるか」は、そのままの形で「語られる」ことはけっしてないが、「どのようなものであるか」を「語る」ことを通して確実に「知られてくる」ということであったと思われるからである。

■ 「何であるか」を「語る」ことはできない

そこでプラトンはまず、「何であるか」を直接的に記述する試みは必ず失敗せざるをえないこと、そしてその理由は、語りうるのはいつも「どのようなものであるか」に止まらざるをえないからであることを、『メノン』第一部（71e-80d）によって、読者に解明してみせる。この部分の対話は、「徳とは何であるか」へのメノンの答えをソクラテスがすべて論駁して、メノンをアポリアに陥れているさまを描いている点で、初期対話篇とまったく同じ構造を示す。ただ違うところは、プラトンが、初期対話篇のソクラテスの「何であるか」の問いがどんな答えを要求しており、どんな答えを要求していなかったかについて、またこの問いへの答えの企てが——つまりこの問いの対象を直接的に記述しようとする企てが——なぜどのようにして挫折せざるをえなかったかの理由を、プラトン自身の用語で解説してみせている点である。

この解説によれば、メノンの失敗とは、第一に、「一つ」のものを問う問いに「多く」のものを答えてしまったことである（71e-74a）。「徳」の「何であるか」を問うソクラテスの

問いに、メノンは、「男の徳」や「女の徳」や、「子供の徳」、「老人の徳」、「自由人の徳」、「召使いの徳」などを列挙し、「さらに他にも多くの徳があるから、徳の何であるかを語ることに行き詰まることはない」(72a1-2)と見栄を切った。しかしソクラテスが求めているのはこれら「多くの」徳ではなく、これらに共通な「一つの」徳だった。また第二に、メノンの失敗は、「全体」(79b7-8)を問われながら「部分」を答えてしまった点にある(77b-79e)。というのはメノンは、「正義や敬虔にかなった仕方善きものを獲得すること」を徳であると答えたが⁽⁴⁾、それは「徳」の「部分」をすでに知っているものとして、それによる説明を与えていることになる。だが、「ひとは徳そのものを知らないのに、何が徳の部分であるかが分かるはずがあるだろうか」(79c8-9)。

このようにプラトンはここで、メノンの失敗を二通りに解説しているが、実はこれらは同一のことの二つの表現と見ることができる⁽⁵⁾。つまり「何であるか」の問いは「徳」を「一つ」の「全体」として問うていたのに、メノンは「多く」の「部分」を答えてしまったのである。

しかもさらに、プラトンは明言していないが、われわれはこれらの議論から、メノンの失敗とは、「何であるか」の問いに「どのようなものであるか」を答えてしまったものに他ならないと理解することができる。なぜなら、例えばメノンが「男の徳」や「女の徳」その他の「事例」を答えたことは、「徳とは例えばどのようなものであるか」を答えたことであり、またかれが「正義によって」(73d7-10)というように「徳の一種」(73e1)による説明を与えたことは、「どのような徳によってであるか」を答えたことになるからである⁽⁶⁾。

(このことはまた、先に触れた、「ひとは徳そのものを知らないのに、何が徳の部分であるかを知ることができようか」(79c8-9)とのソクラテスの発言と、すでに見た冒頭部分の、「何であるか知らないものについて、それがどのようなものであるかをどうして知ることができようか」(71b3-4)という発言との対応からも、裏付けられるだろう。)

こうして、これらの議論の途中で「形」について言われていた、「いつもわれわれは、たくさんものに行き着いてしまう」(74d4)という嘆きは、そのまま、「(「何であるか」を求めながら)いつもわれわれは「どのようなものであるか」に行き着いてしまう」という嘆きとして理解することができる。つまり『メノン』第一部は、「何であるか」を語る試みが必ず挫折し、ただそのさまざまな部分部分が「どのようなものであるか」だけを、「断片的に」(79a9-10, c2)語る結果にならざるをえないことを証明したのである。(ひとは、あるいはこの挫折の責めを、対話相手メノン個人に負わせようとするかもしれない。だが、ソ

⁽⁴⁾ 実際には、メノンの答えはつぎつぎと変化している。(1)「美しいものを欲求して、これを獲得する能力があること」(77b)、(2)「善きものを獲得する能力」(78c)、(3)「正義や敬虔にかなった仕方善きものを獲得する能力」(78d) (4)「正義にかなったこと」(78e) ソクラテスの反論は、正確には、この最後の答えに対するものである。

⁽⁵⁾ 「正義」「節制」その他の徳は、「たくさん徳」(74a)とも、「徳の部分」(78d-79a)とも言われている。

⁽⁶⁾ 第三部において「一種の知識」(ἐπιστήμη τις 87c5)は、その前後から明らかのように、「どのようなものであるか」(ποιόν τι)として扱われている。また74b-cの「形」をめぐる解説において「どのような(ὁποῖα τι)形があるか」と問われているのは、「形の一種」(σχῆμά τι 74b7)であり、「他にもいろいろある形」(74c1)である。

クラテスの対話が挫折に終わらなかったことが一度でもあったであろうか。プラトンはいままさに、その問題と取り組んでいるのである。

■探求不可能論と「想起」

ソクラテスはメノンに「徳」の「何であるか」を「語る」ことを要求し、メノンはそれに失敗した。メノンは、ソクラテスに会う前には、徳について「いろいろとたくさんのことを、多くの人々の前で何度も、しかも上手に語る事ができた」(80b2-3) のに、ソクラテスに触れた今は、あたかもシビレエイに触れたように、「心も口も痺れてしまって何を答えてよいか分からなくなってしまう」のである。ソクラテスの「何であるか」の問いに答えようと試みたかれの答えは、どれも、ただ「どのようなものであるか」を語る結果になったために、すべて廃棄させられた。「何であるか」を知らなければ「どのようなものであるか」を知ることはできないはずだ、というのがその理由であった。メノンは語ることを封じられてしまったのである。

そこでメノンは、「探求不可能論」を持ち出してソクラテスにしっぺ返しを試みる(ここから『メノン』第二部(80d-86c)とする)。それは「何であるか」を知らないものの探求を不可能とする議論で、ソクラテスの言葉を逆手に取ったものと解することができる。すなわちそれによれば、もしもソクラテスが言うように、あるものが「何であるか」を知らないときには「どのようなものであるか」についての情報がまったく得られないのだとすると、そのものを探求する手掛りは何一つ無いことになり、探求そのものが不可能になるというのである。

この議論はちょっと見たところでは詭弁のようにも見え、またたしかに「論争家的」な議論ではあるにしても、ソクラテスの立場にとって実質的に手強い議論であることは否定できない。なぜなら、「何であるかを知らないものを探求する」とは「探求しているものが何であるか分からない」ということであり、簡単に言えば「何を探求するか分からずに探求する」ことになるからである。これに対するメノンの論難は、常識的に見て正当かつ重大なのである。

(これに対して、少なくとも「徳」という名称だけは分かっているではないかという反論があるかもしれないが、『メノン』冒頭のソクラテスの立場を守る限り、それは無効である。なぜなら、いまは、「徳」の名で呼ばれるものの意味が全く知られえないことが前提なのだから、この語の世間での用法などは何の参考にもならないからである。さらに別の面から言うならば、(探求しているのは)「徳である」という情報は、一つの「述定」であるかぎり「どのようなものであるか」に含まれると考えられ、したがって——ソクラテスの前提により——これがはたして当のものの正しい名称であるか否かさえ知られえないことになる。)

ソクラテスのそのような探求がはたして可能かという問題は、実のところ由々しい難問であろうと思われるのだが、プラトンは、人間にとって「探求する」(言いかえれば「知る」

(7) とは「想起する」ことにほかならないという理論を提出して、この難問を乗り越えようとする⁽⁸⁾。

「想起」とは言いかえれば「知」の回復のことだが、プラトンがこれによって言おうとしたことは、われわれ人間は「徳」の「何であるか」についてはまったく無知であるが、それが「どのようなものであるか」についてはさまざまな「思われ」（「考え」）を持っているので、そこから「徳」の「何であるか」の「知」を回復することができる、ということであったと思われる。ただしそれは一挙に可能なことでは、けっしてない。われわれはその想起の作業を、まずわれわれ自身の「思われ」を言論として語り、それら相互の論理的関係を調べることによって、われわれの中に混在する雑多な思われの中から、真である思われを選び取ることから始めなければならない。

その過程を実地に実験して見せたのが、いわゆる「想起実験」と呼ばれる、ソクラテスと召使いの少年の対話である。ここでは対話は、まず「正方形の平面」(τετράγωνου χωρίου) について、少年がそれを「どのようなもの」と考えているかの確認(82b9-10)から始まり、その二倍の面積の図形が「どのような」線(辺)から出来るかを求めてゆくという設定で対話が進行する。少年は初め、単純に、求める二倍の正方形は二倍の線から出来ると思っており、そのように答えるのだが、「線が二倍であれば面は四倍である」こと、そして「三倍であれば九倍である」ことを——つまり「どのようであれば、どのようであるか」を——ソクラテスの助けを借りて覚えてゆく。そして結局、少年は、このことについての自分の無知を自覚するに至る(84a1-2)。そしてこの現場に立ち会っていたメノンは、これが「想起」の一段階であることを納得させられるのである(84a-c)。

この「想起実験」で面白いのは、ここには「何であるか」の問いが一度も提出されていないことである。少年に与えられた課題は「二倍の正方形面はどのような線から作られるか」(cp. ὁποία ἐστὶν (sc. ἡ γραμμὴ) ἀπ' ἧς ... 82e5-6) であった。つまり、この問題それ自体も、この問題の解決に至るまでの議論も、すべて「どのようであれば、どのようであるか」

(7) この原文はふつう、「探求すること、そして学ぶことは、全体として想起にほかならない」(81d4-5)と訳される。この「学ぶ」は 'μανθάνειν' の訳語であるが、'μανθάνειν' の訳語としては「知る」の方が適切な面もある。人は「知る」ことによって「知っている」状態へと移行するが、'μανθάνειν' とはまさにその移行のことを指すからである。しかもこれは、自分で知るようになる場合についても言えるし、だれかから教えてもらって知るようになる場合についても言える。また記述知についても、直接知についても、言える。これらの二義性は、とりわけ『メノン』においては、本質的に重要な意味をもつ。実はここから、ソクラテスとメノンの対話の行き違いが生じているからである(註9参照)。しかし他方、「学ぶ」の訳語の方が優れている面もある。この語は「教える」と対をなすからである。プラトンはこれを利用して、「想起実験」は「想起」すなわち「学ぶ」ことの可能性を証明しているはずなのに、そこでは「教える」ことはなされていない(じつはメノンの意味でだが)(82e4, 84c11-d2, 85d3, e1, e3, e6) という、奇妙な対話を演出している。『メノン』では「学ぶ」も「教える」も二義的なのである。

(8) この、いわゆる「想起説」は、表面上は神話的な語り口で語られるが、その内実は高度に合理的な理論であると考えられる(『ギリシャ哲学セミナー発表原稿集』拙稿「哲学は何をどのように知ってゆくのか」p.7参照)。というのも、プラトンはこの理論を、幾何学の作図問題をめぐるソクラテスと召使いの少年の間の実験的対話によって、見事に証明して見せており、そこには何ら神秘的な色彩は認められないからである。さらに、すでに見た『メノン』第一部の論駁的対話、および第三部における「前提仮設の方法」も、「想起」の実践例と見られ、それらについても同じことが言える。というより、ソクラテスの論駁的対話がつねに無知の知へと導くことができたその過程を、プラトンは「想起」と捉えたのである。

という定式で括られる言論を用いて構成されていた。とすると、この対話の過程で少年がしだいに「想起」していった「何であるか」とは何であったのか。それは、たとえば「正方形の（二次元の）平面」というものの「何であるか」の「理解」であったのではないだろうか。ソクラテスと少年の対話は、このものを探求の目標として目指しはしなかったが、このものについての少年の理解と、かれの無知の自覚は、「どのようなものであるか」のみにかかわる対話の過程でも、確実に深まっていったことが期待できる。われわれはここに、探求するものの「何であるか」を知らないままで探求が成立する、一つの雛形を見ることができるよう思われる⁽⁹⁾。

■前提仮設の方法

メノンはソクラテスの想起実験によって説得され、探求不可能論を撤回せざるをえない。だがかれはここで、「徳」の「何であるか」の探求をしばらく棚上げして、かれの最初の問題であった「徳は教えられるか」の方を先に考察してほしいと言う。ソクラテスは、それは「何であるか」の前に「どのようなものであるか」を考察することになるが仕方があるまいと言って、これに譲歩する。が、それに一つの条件を付ける。それは、その考察において、「どのようなであれば、どのようなであるか」というように、「どのようなものであるか」どうしの論理的関係をしらべる「前提仮設の方法」を採用することである。メノンはこれを受け入れ、そこで考察が始まる（ここから最後までを『メノン』第三部（86c-100c）とする）。

われわれは『メノン』第三部冒頭のこの二人の取引きを、どう理解すべきだろうか。ソクラテスは本当にメノンに譲歩して、「何であるか」の探求を放棄したのだろうか。そしてかれはここでは、いつもの哲学的探求を中止したのだろうか。それともかれの譲歩はうわべだけのことであって、実はソクラテスは、この後の対話でも、いつもと変わりなく自らのやり方で哲学的探求を遂行しているのか。なぜなら、もしソクラテスがメノンに全面的に譲歩したのだとすると、かれが交換条件としてメノンに受諾させた「前提仮設の方法」の

⁽⁹⁾ ソクラテスの「想起」論は、もともとメノンの「探求不可能論」への反論であるから、「何であるか」を「知る」ことの可能性を説明するものでなければならない。これは「想起実験」についても同じである。ところが実際の「想起実験」の結果を見ると、「想起」されたのは「(ある正方形面の二倍の正方形面を作るには、) もとの正方形の対角線を一辺としてもつ正方形面を作ればよい」という答えである。これは「どのようなものであるか」(cp.「徳はどのようにしてそなわるか」)についての「正しい思われ(考え)」(85b8, c4, c7, c10)であって、いまだ「何であるか」の「知」ではない。それにもかかわらずメノンがこの「実験」に満足し説得されたのは、かれには、「どのようなものであるか」の「思われ」を「語る」として、「何であるか」を「知る」ことの違いが分からなかったためであり、またかれが「自分は知っている」と自負している幾何学的解答に到達したことで、「たしかに知が想起された」と満足してしまったからである。そのかぎりではこの「想起実験」は *ad hominem* なものと言わなければならない。しかしこれは事柄の半分である。ここにはメノンが気付かなかった真の意味での「想起」が、ある程度まで実現している。つまり、「何であるか」の「知」が、ある程度まで得られている。それが、たとえばここに論じた「平面」というものの「何であるか」についての「無知の自覚」であると考えられる。(ソクラテスの対話は「無知の知」において完成する。それは、たとえば「徳」が、自分がまだよく知らないものとして確かにある、という認識である。)

採用にどんな意味があるのか分からなくなるのではないか。実は、その方法の採用によって、かれらの探求は、ソクラテスのいつもの「何であるか」の探求と少しも異ならないものになったのではないか。その辺の事情を、第三部の議論を分析することによって確かめよう。

「前提仮設の方法」とは、たとえば「徳は教えられる」か「徳は教えられない」かを考察するために、どのような前提を仮設すればこれらの結論が出てくるかを考察する方法である。ソクラテスとメノンは、その考察を開始し、ただちに次の論理を発見する。

(1) もし「徳が知である⁽¹⁰⁾」ならば「徳は教えられる」ことになる

つぎにかれらが考察すべきことは、「徳は知である」か否かである。その手掛りとなると考えられるのは、

(2) 徳は善いものである

と思われることである。というのは、もしも先ずこのことが言えて、さらにこれに加えて、

(3) もしも x が善いものであるならば、 x は知である

ということが言えるなら、これら二つから、「徳は知である」と言えることになろう。

そこでかれらは (3) の考察に取り掛かる。まず、人が「徳」をもつとき、その「徳」によってその人は「善い (すぐれた)」人になること、そして「善い (すぐれた)」人は「有用な」人のことであること、したがってさきほど言われた「徳は善いものである」とは「徳は有用なものである」ことにほかならないことを確認する。つぎにかれらは、さまざまな「有用なもの」として「健康、強さ、美しさ、富」などを列挙し、これらが有用になるのはただ「正しく使用」されたときに限るのであり、それは「知」が導き手となるときであることを認め、他方「節制、正義、勇気、理解力、記憶力、度量」などの魂の徳も、「知性」が伴うときはじめて有用となることを確認する。そしてここから、

(4) もしも x が有用なもの⁽¹¹⁾であるならば、 x は知である

が成立すること、したがって (3) が成立することを確認するのである。

こうしてソクラテスとメノンは、(2) と (3) から、「徳は知である」という結論を得ることができ、さらにこれと (1) から、「徳は教えられる」という結論を得ることができた。

ところがここでソクラテスは、以上の考察がもしかしたら間違っていたのではないかと言い出す。それは、「徳は知である」という、(2) と (3) から導かれた結論そのものに疑問があるからである。というのはもし「徳が知である」ならば「徳の教師」がどこかに存

⁽¹⁰⁾ 「徳が知である」という表現は、一見したところ、「徳」の「何であるか」を語っているように見えるが、違う。プラトンはこれが「どのようなものであるか」を語るものであることを明示するために、これを、「徳がもしも知のようなものとちがったようなものであるならば (εί ἐστὶν ἄλλοῖον ἢ οἷον ἐπιστήμη 87b6-7)、それは教えられるだろうか、教えられないだろうか (87b6-7)」という異常に持って回った言い方を用いて、きわめて慎重に提示している。これに関しては、拙稿「「何であるか」の知——『メノン』と『分析論後書』——」『北海道大学文学部紀要』98(1999) p.1-32 の註6にやや詳しく論じた。

⁽¹¹⁾ 「知」が「有用なもの」と言われる場合、それは一種の原因として、つまり「利益をもたらすもの」という意味で言われていると考えられる。「徳」が「善いもの」であると言われるときも同様であろう。この点で、「健康、強さ、美しさ、富」が「有用なもの」と言われるのは少し違うところがある。さもないと、「富」その他も「知」であることになってしまうだろう。

在するはずだが、自分にはそう思えないのだとソクラテスは言う。そこでかれは、ちょうどそこに来合わせたアニュトスを相手に、その点を検討する。その結果、徳の教師を自称するソフィストたちは徳の教師とは認められないこと、またアテナイのすぐれた政治家であった、テミストクレスやアリスティデスやペリクレスやトゥキュディデス等は、かれら自身は「徳のある」人物でありながら、自分の息子たちを徳のある人間に育てることができなかったことが判明する。つまり、「徳を教える」人はいなかったのである。こうして「徳は知である」ことは否定されることになる。すなわち、

(5) テミストクレスやその他そのような人たちは「徳のある」人たちであるが、かれらは「徳を教える」ことができなかった。したがって「徳は教えられない」のであり、したがって「徳は知ではない」

それでは、ソクラテスとメノンのさきほどの考察の誤りはどこにあったのか。ソクラテスによれば、それは、(4) の、「有用なもの」であれば「知」であるという判断にあった。というのは、「有用」なものは「知」だけであるとはかぎらず、「正しい考え（正しい思われ）」もまったく同様に「行動を正しく導く」ことができ、「有用」なものである。つまり、

(6) たとえば「正しい考え」は、「有用」であるが、「知」ではない

ソクラテスとメノンはこのことに気付かなかったために誤ったのである。メノンもそれを認める。

こうしてソクラテスとメノンの結論は、「徳」は「正しい考え（正しい思われ）」であり、それは「神の恵みによって」そなわるものである、ということになる。ただし、これについての明確なことは、「徳はどのようにしてそなわるか」よりも先に、「徳」そのものの「何であるか」を探求するときこそ知られる、とソクラテスは最後に付け加える。

われわれはこの『メノン』第三部をどう理解すべきだろうか。プラトンはこれによって、われわれ読者に何を伝えようとしたのか。それは、すでに「想起実験」において示唆されていたこと、すなわち「何であるか」を知らないものの探求の可能性を示すことではなかったか。たしかに第三部には、「何であるか」は語られていない。そこで語られたのはすべて「どのようなものであるか」に尽きる。「どのようなものであるか」とは、われわれが初めに考察したように、「(なにかについて) 語られること」であり、「述定」、ないしは「述語」である。たとえば「前提仮設の方法」において、「もしも「徳が知である」ならば、「徳は教えられる」ことになる」と論ずるとき、ここでの前提と結論はそれぞれ「述定」であり、ここで考察の対象とされたのはもっぱらそれらの述語項と述語項の関係についてであった。つまりここでは、主語項である「徳」の「何であるか」は考察の外におかれていた。だがこのことは、そのまま、「何であるか」がどこにも見えてこないことを意味するのだろうか。われわれは「想起実験」を思い起こそう。そこでも「何であるか」の問いは立てられていなかったが、それでもその「想起」は着実に進行していたのではなかったか。それと同じことを、われわれはこの第三部の「前提仮設の方法」による探求の中に、見て取ることはできないだろうか。

■『ラケス』との対応

そのあたりのことを確かめるために、われわれはひとまず、われわれに馴染みの深い初期対話篇の『ラケス』に目を向け、そこで試みられた「定義」がどのようにしてアポリアに導かれたかを見ることにしよう。というのは、われわれに馴染みの深いこの対話篇の中でなら、より容易に、「何であるか」の探求の構造を見て取ることができると思われるからである。

いま注目したいのは、「勇気」は「思慮ある忍耐」であるというラケスの定義の試みをソクラテスが論駁する部分(192d-193d)である。まずその「定義」は次のように表現される。

(7) 「勇気」とは「思慮ある忍耐」である

つぎにわれわれはこの表現を、『メノン』の「前提仮設の方法」の定式にならって、次のように、いわば翻訳してみよう。

(8) もし「xが思慮ある忍耐をもつ」ならば「xは勇気がある」ことになる

この翻訳は、初期対話篇の「何であるか」の定義形式を『メノン』第三部の「どのようなものであるか」の述定形式に変換したものである。この手続きは、被定義項の「名辞」も、定義項の「説明」も、言論であるかぎり「どのようなものであるか」に属するという、『メノン』におけるプラトンの思想に沿っている。なお、ここでは前件を十分条件、後件を必要条件として表現しているので、定義の同値関係の表現としては不完全であるが、いまの議論には差し支えがないと思われる。

このラケスの定義に対してソクラテスは、「儲かることが分かっているので忍耐強く投資し続ける投資家」や、「医術の知識ゆえに忍耐強い医師」や、その他の技術者たちの例を用いて、ラケスに次のことを認めさせ、上記の(8)を論駁する。

(9) ある人たち(忍耐強い投資家や医師やその他そのような人たち)は「思慮ある忍耐をもつ」が、その人たちは「勇気がある」わけではない

ソクラテスのこの論駁は、二つの意味で、対話相手ラケスを「何であるか」の探求に向かわせる力をもつ。その第一は、言うまでもなく、(8)つまり(7)の「勇気」についての定義の試みをアポリアに陥れて、その(すでに問われていた)「何であるか」の探求に再び出発させることであるが、さらに第二に、この論駁は(9)の論駁に語られていた「思慮」の(いままで問われていなかった)「何であるか」の問題の存在にも気付かせる意味をもつ。なぜなら(9)では「忍耐強い投資家や医師やその他そのような人たち」が無造作に「思慮がある人たち」とされていて、「思慮」が「技術知」と同一視されているが、そこに一つの問題があるからである⁽¹²⁾。

ではつぎに、われわれがこの『ラケス』で観察したことを、『メノン』第三部に対応させることを試みよう。まず、『ラケス』の(8)は(9)によって論駁されたが、これをわれわ

(12) 「思慮」(たとえば「勇気」の「知」と「技術知」を同一視できないことは、『ラケス』195b-dにおいてニキアスの口から語られている。この問題については、拙稿「ラケスはなぜ論駁されたか」『西洋古典学研究』L(2002)p. 8-9でも論じた。

れは、たとえば『メノン』第三部の(4)と(6)に対応させることができるだろう。なぜならこれらはいずれも、反例の提示による、同型の論駁と見られるからである。そしてもしこの対応が成り立つとすると、ちょうど『ラケス』の論駁が「勇気」の「何であるか」を問い直させたのと同様に、『メノン』の論駁は、ある仕方で、「知」の「何であるか」を問い直させるものであることが分かる。というのもメノンとソクラテスは、(4)の判断において、「知」をただ行為の成果を成功に導く⁽¹³⁾「有用なもの」としてのみ理解していたために、「知」と「正しい考え」の区別がつかなくなり、それがもとで(6)の論駁を受ける結果になったと考えられるからである。こうしてこの論駁は、われわれに「知」の「何であるか」を新たに問い始めさせる力をもつ⁽¹⁴⁾。

では、『ラケス』の(9)における「思慮ある」ことの「何であるか」にかかわる問題示唆に相当するものは、『メノン』のどこに見られるか。それは、たとえば(5)の、「テミストクレスやその他そのような人たちは徳のある人たちである」という判断(思われ)の中の、「徳のある」という語の用法に対応させることができる。この人たちがもし「徳のある」人たちでなかったとしたら、「徳は教えられない」という判断は成立しなくなる可能性がある。つまりわれわれは、あらためて、「徳」の「何であるか」を問い直す必要がでてくるのである。(われわれはここで、『メノン』の最後(100b4-6)にソクラテスが語った、「これらについての明確なことは、「徳は教えられるか」ということよりも先に「徳」そのものの「何であるか」を探求するとき知られてくるだろう」という言葉を思い出すべきだろう。)こうしてわれわれは『ラケス』との対応を見ることによって、『メノン』第三部の中に「何であるか」の探求の可能性を見出すことができる⁽¹⁵⁾。

■ 「どのようなものであるか」のアポリア

『メノン』第三部は、たしかに、「徳」の「何であるか」についての問いを放棄したかに

⁽¹³⁾ 「行為の成果」(τὸ ἔργον ἐκάστης τῆς πράξεως 98b8)、「成功」(ἐπιτυχάνοι 97c7)、「うまくゆく」(τυγχάνοι 97c10)などを参照。「ラリサへの道」に「正しく導く」という例も、行為の成果だけを問題にしている。メノンは第一部の対話においても、「徳」を、外に現われた「行為」によって定義しようとして失敗を重ねた(「男の徳は、国事を処理する能力を持ち、友を利し敵を害し…」(71e)、「人を支配する能力を持つこと」(73c9)、またかれは、「美しいものを欲求して、これを獲得する能力を持つこと」(77b4-5)を「善きものを獲得する能力」(78c1)と言い換えるソクラテスの提案に、何のこだわりもなく同意してしまっている)。このようなメノンの人となりの描写も、『メノン』の主題を構成する重要な部分である。また、「知」と「正しい考え」を区別できないのも、メノンの人となりによる(第三部のこの対話のほか、第二部の想起実験でも、メノンは「対角線」という「正しい考え」への到達を「想起」と認めてしまっているようである)。

⁽¹⁴⁾ この問いは、最初に得られた「もしも徳が善いものであるならば徳は知である」という推論の意味を再び問い直す問いである。つまり直観によって得られたこの推論には何らかの正しさがあると思われるが、もしそうだとするとこの推論を成り立たせるものは何か。言いかえれば、この推論において「知である」と述べられる理由は何か。アリストテレスはこれを「中項は何か」の探求であり、それが(ここでは「知」の)「何であるか」の探求に他ならないと解説している(『分析論後書』B2 89b38-90a, et al. なお前記(註(10))拙稿「何であるかの知」を参照)。

⁽¹⁵⁾ この他にも、例えば「教える」ことの「何であるか」を問い、これを探求することができる。たとえば、ソクラテスこそは真の意味で徳を「教えた」のだという見方もありうるだろう。

見えたが、それにもかかわらずそれは、「徳」や「知」の「何であるか」の探求へとわれわれを導き、それらについてのわれわれの無知を覚らせる力を示している。このことをわれわれに気付かせるきっかけになったのは、『ラケス』における「何であるか」の定義方式の、「どのようなであれば、どのようなであるか」の推論方式への変換であった((7)の(8)への変換)。そしてこの変換の可能性をわれわれに気付かせてくれたのは、すでに触れたように、定義の試みにおいては、被定義項の「名辞」も、定義項の「説明」も、言論（語ること）であるかぎり、いずれも必然的に「どのようなものであるか」に属することになるという見方である。初期対話篇のソクラテスは、対話相手の試みた定義をいつもアポリアに追い込んだが、そのアポリアは、実際にはつねに、(われわれが(8)と(9)において見たように、)「どのようなものであるか」の言論どうしの矛盾として明らかになっていたのである。プラトンは『メノン』において、これらすべてを洞察したのだと思われる。

ソクラテスのアポリアがつねにこのようなかたちで現われるということは、結局、「何であるか」についての無知は、つねに「どのようなものであるか」についての無知としてのみ明らかになる、ということ語っている⁽¹⁶⁾。そしてこのことはまた、ソクラテスの対話法の秘密の一端を解き明かす。というのは、ソクラテスの方法の要諦は、いかにして「何であるか」の無知を覚るかというところにあるからである（というのも、それがまさに、「何であるか」の存在を知ること——いまだ明確に見ることはできないにしても——になるからである）。

そこでこの発見をもとに、プラトンは『メノン』第三部において、新しい対話法を提示した。それが、われわれが見たとおり、「何であるか」を問いとして問うことなしに、「何であるか」を探求する方法であった。かれがこの方法をここに示した一つの理由は、「何であるか」を問わなくても、「どのようなものであるか」についての考察のみによって、初期対話篇の『ラケス』におけると全く同様に、「何であるか」の探求へと導かれ、無知の自覚に至ることが可能だったからであった⁽¹⁷⁾。しかし、「何であるか」を問わない、より大きな理由はおそらく、この探求が、「何であるか」を語るのではなく、「何であるか」を知ることを目指すものだというところにある。ところが「何であるか」の問いは、問いとして発せられるかぎり、「何であるか」を語ることを要求してしまう。つまり「定義」を要求する。「何であるか」の探求するものはこれではない。

そしてさらに、おそらく、もう一つの理由は、初期対話篇における「何であるか」の問

⁽¹⁶⁾ 「想起実験」において、召使いの少年の、「正方形の平面」の「何であるか」についての無知が、「辺を2倍にすれば面が2倍になるのではないか」とか、「辺を3ブースにすれば面が8平方ブースになるのではないか」というような、「どのようなであれば、どのようなであるか」についての無知として明らかになったことを思い起こそう。

⁽¹⁷⁾ われわれがこのように言うとき、「ほんとうに明確なことは、徳がどのようにしてそなわるかよりも先に、徳そのものの何であるかの探求を試みたとき知られてくる」という『メノン』末尾のソクラテスの言葉がこれと矛盾しないか、問題になるだろう。しかしこの言葉は「何であるか」の「探求」(ζητεῖν 100b6)を勧めているのであって、定義を要求しているのではない。また、「先に」の要求は、原因を探求する哲学として当然の要求であって、第三部における「どのようなものであるか」についての考察も、探求の本来の目標を「何であるか」に置かざり、これと矛盾しない。あるいは、第三部の「どのようなものであ

いがいつもソクラテスからの問いであって、われわれ自身からの問いではなかったことにある。たしかに初期対話篇のソクラテスは、いつも対話相手の人間性を直ちに見抜き、その人が無視できない主題を問う能力をそなえていた。しかしこのようなことは誰にでも真似のできるものではない。それよりは、たとえば「徳はどのようにすれば身につくか」という問いのように、われわれの日常生活の関心事である「どのようなものであるか」の問いから出発して、「何であるか」の無知を、われわれ自身の生きることに関わる無知として、自発的・内発的な仕方であることができれば、無知の知はより本来的な形で、しかもより普遍的に（つまりソクラテス個人に依存せずに）実現することになると思われる。

『メノン』第三部には、われわれをそのような無知の知へと導く、少なくとも一つの、「どのようなものであるか」に関わるアポリアがある。それは、第三部前半の「徳は知であり、したがって徳は教えられる」という結論と、後半の「徳は正しい考え（正しい思われ）であり、徳は教えられることなく、神の恵みによって与えられる」という結論との間の齟齬である。この二つの結論が互いに衝突し、一種のアポリアを形成することは、注意深い読者にはほぼ明らかであろう。このアポリアが、すでに見た、「知」や「徳」の「何であるか」の問いにわれわれを導く。だがプラトンは——つまり『メノン』のソクラテスは——このアポリアを明言していない。なぜか。それは言うまでもなく、「徳は教えられるか、それとも徳は教えられないか」というところには、真の問題はなかったからであり、もう一つの理由は、おそらく、アポリアそのものが、語られるべきものではなく、むしろ語られることを通して知られるべきものだからであろう。

■何があるか——むすび——

プラトンの、『メノン』における仕事は、「何であるか」の問いと「どのようなものであるか」の問いを二つに分けることであつたと言ってもよいであろう。それを必要とした理由は、おそらく、初期対話篇のソクラテスの「何であるか」の問いの二義性にあつた。この問いは、「知る」ことを求めるものであつたと同時に「語る」ことを求めていたからである。しかし「何であるか」は「一つ」の「全体」であるから、もともと人間の言論によっては、すくなくとも直接的には、語り得ない。その試みは必然的に失敗するのである。だがこれをそのまま、「知る」ことの失敗と誤解して、哲学を断念してはならない。そこでプラトンは、「何であるか」そのものではなく、その「多く」の「部分」について、それが「どのようなものであるか」の「思われ」を語ることを通して、間接的に、「何であるか」の「知」に近づく可能性を証明しようとしたのだと思われる。

「間接的に」とは、まず、「何であるか」の問いに直接的に答えることなしにという意味であるが、また同時に、「何であるか」の問いを、すくなくとも初めからは問うことをせずにとということでもある。プラトンは『メノン』第三部において、「どのようなものであるか」

るか」の考察を通してこそ、「何であるか」を先に探求する必要性に気付くのだと言ってもよいだろう。

の問いから出発したが、それを「どのようであれば、どのようであるか」という論理的関係の考察につなげてゆき、そこから「何であるか」の問いを、いわば自ずから浮上させた。

「知」の「何であるか」、「徳」の「何であるか」などがそれであった。ただしこれらの問いは、おそらく、もはや直接的な答えを要求するものではないであろうから、「問い」ではなく、むしろ「何であるか」そのものの存在が浮上してきたと言うべきだろう。しかしとにかく、「知」や「徳」の「何であるか」が自ずから姿を現し始めたのである。

プラトンが提示したこのような方法の転換は、しかし、初期対話篇のソクラテスの哲学に、さらなる変化をもたらし得るものである。

初期対話篇でのソクラテスの対話は、いつも、かれの「何であるか」の問いかけから始まった。かれがそこで問うたのは、「勇氣」や「節制」や「敬虔」といった「徳」についてであった。つまりこれらの「何であるか」が、最初にソクラテスによって目標として設定されて、探求が始まったのである。だが『メノン』第三部の探求はこれと趣きを異にし、「何であるか」は「どのようなものであるか」の探求の中から自ずから姿を現した。したがってここでは、何が現われてくるかは、予め知られてはいない。すでに見たように、『メノン』における「知」や『ラケス』における「思慮」は、そのように、問われることなくして現われてきた。しかしそういうことになれば、探求されるべきもの、すなわち「何であるか」は、もはや倫理的な事柄に限られないことになるだろう。そしてそれは、哲学が「知」の探求である以上、そして「知」の対象が倫理的なものに限られないとすれば、必然的なことなのだろう。

「何であるか」は、おそらく、実は、向うから現われてくる。そしてもしそうだとすれば、われわれの「何であるか」についての無知は、実は同時に、「何があるか」の無知なのではないだろうか。

後 記

小論は、2003年9月13・14日に学習院大学において開催された「第7回ギリシャ哲学セミナー共同研究セミナー」での口頭発表の原稿を全面的に書き改めたものである。当日は発表後の討論において、多くの方々から理解と励ましにみちたご意見とご教示をいただいた。小論の論述を大幅に改善できたのはそのお陰である。ここにそれを感謝申し上げ、寄せられたご意見の要旨を簡略に報告する。ただし、(1)これらのご意見は当日の発表に関してのものであり、本小論についてのものではないこと、(2)ご意見の表現は筆者が理解できるかたちに表現しなおしてあること、の二点をお断りしておく。

ご意見とご教示をお寄せ下さったのは、山本建郎、岩田靖夫、加藤信朗、神崎繁、荻原理、今井知正、高橋久一郎、渡辺邦夫、納富信留、および司会者の三嶋輝夫の諸氏である

(司会者以外は発言順。以下のご意見も発言順であるが、かならずしも上記のお名前に対応しない)。

1. 「探求のパラドックス」は、はたして『メノン』第二部と第三部によって解決されたのだろうか。「想起実験」は「無理数」の把握にまで至っていない点で失敗であり、「前提仮設の方法」も「正しい思われ」にしか到達していないからやはり失敗であるように思われる。

2. もしもプラトンの主張が、「何であるか」の探求が「どのようなものであるか」を通してなされるということにあるとすると、一般にすべての探求がそうであって、当たり前のごとくにすぎないように思われる。初めはぼんやりとしか分からなかったものが、しだいに明らかになるのは普通のことだからだ。プラトンはいったい何を言いたいのだろう。「前提仮設の方法」のポイントはどこにあるのか。

3. 「前提仮設の方法」との関係で、「イデア論」をどう位置づけるかが問題だろう。たとえば『パルメニデス』第二部もまた「前提仮設法」の一つと見ることができる。また『国家』の第4巻から第5巻にかけて、「何であるか」から「どのようにすれば実現できるか」への移行がある。これと『メノン』の関係をどう考えるかも一つの問題である。

4. 「メノン」本人と「徳」そのものを同列に考えることは難しい。「メノン」本人を知るには会いにゆけばよいが、「徳」に会いにゆくというわけにはゆかない。「メノン」は $\delta\rho\alpha\tau\acute{o}\nu$ だが「徳」は $\acute{\alpha}\rho\alpha\tau\acute{o}\nu$ なものだからである。となると、第三の対比の例をどのような意味で受け取ればよいだろうか⁽¹⁸⁾。

5. 「メノン」という人物を例としてもちいた議論、想起実験の「幾何学図形」をもちいた議論、そして「徳」についての議論を、プラトンは、タイプの異なる三つの議論として提出していると思われる。ここには、「線分の比喩」で語られているような、探求の段階、ないしはプログラムのようなものがあるのではないか。

6. 発表者は「何であるか」の問いと「どのようなものであるか」の問いを相互に近いものと見る解釈を示したが、「何であるか」の問いはあくまでも独自の問いではないか。この問いは答え方に強い形式的制約を加え、その条件に合わない答えを放棄させることによって、「不知」を明らかにする力をもつ。ところが、第三部の「徳は教えられない」という議

⁽¹⁸⁾ この問題については本論で説明しなかつたのでここに補足したい。第三の対比は、「メノン」という人物を例に、「知る」という語の用法をあるかたちで規定しているが、それが「見る」という意味だとはひとことも言っていない。だが「比喩」として「知」のイメージを与えているとみることが許されるだろう(本論の「見知りによる直接知」(p.4)も比喩の域を出ない)。おそらく、われわれ人間の身では、「徳」の「何であるか」を「面と面を合わせる」ように見ることはできないだろう。またこれと関連するが、ご意見(7.)のご指摘の通り、第三の対比の例から(さらにそれを「探求のパラドックス」と抱き合わせて)「人捜し」のイメージを導き出すのは間違いであると思われる。その誤りは、メノンに会ったことさえないならメノンについては知りえないという話を、メノンに会えばメノンを知ったことになるという話に——つまり否定を肯定に、「無知」の話を「知」(「探求」)の話に、そして必要条件を十分条件に——そのまま置き換えてしまったところにある(しかも、それをまたそのまま「徳」の探求に適用すれば、誤りは二重になろう)。「人捜し」で見つかるのは、あえていえば「メノン」の「事例」であり、それは「どのようなものであるか」に止まる(本論p.7)。(この問題はさらに、「メノン」の目に見える姿はかれの「実体」であるかという問題に発展するだろう。)

論は、「徳」の「何であるか」について大した光を与えていないのではないかと。となると、「何であるか」を「どのようなものであるか」を通して明らかにしている、とさえ言えないことになりはしないか。

7. 『メノン』の冒頭では、一見、「徳」とは「何か」の探求が、「メノン」とは「だれか」を探す「人捜し」の場合と同列に論じられているように見え、そこが非常に分かりにくい。それらがパラレルだとはとても思えないからだ。したがってここでは、「メノン」を探し出すといったことではなく、むしろ「メノン」という「人間」の探求のようなことを考える必要があるのではないかと。また、『メノン』以前と以後との間には大きな断絶があると思われるが、その断絶をどのように捉えるかも考えてみたい。

8. 初期から中期の入口までの作品は単なる「哲学の勧め」という性格が強い。『メノン』の「想起」もそういうものだろう。そこには「対話」という「方法」しかない。『メノン』だけを論ずることはあまり意味がなく、むしろ「アイデア」をどう論じてゆくかが大事な問題だろう。アイデアをどう理解するかを明確にしないと、初期対話篇を研究する意味も明らかにならないと思う。

9. 『メノン』第三部のソクラテスは、一見、「何であるか」の問いから切り離して「どのようなものであるか」を探求することができるように見える。しかしもしわれわれが、それをかれの本当の考えだと解釈するならば、われわれはかれを「アイデア」否定の立場に立たせることになり、まずい。『メノン』の「前提仮設の方法」は、第三部の探求が失敗に終わっていることから見ると、『パイドン』や『国家』のそれとは異なるもののように思われる。前者が幾何学をモデルにしているのに対して、後者がアイデア論から始めているところは大きな違いである。「どのようなものであるか」から始めようとするのは、反アイデア論的であり、客観的価値や絶対的なものに対して反旗を翻すことになりはしないか。

10. ミュートス的な「想起説」には触れたがらない研究者が多いが、われわれは「想起説」をどのように説明したらよいか。幾何学の問題による想起実験は「想起」の「実践」として提出されていて、「説明」にはなっていないと思う。それに先だって語られている「想起説」の内容をどう理解するか。また、この説は初期から中期への移行を示すように見えるが、そう見てよいか。それはなぜか。 〈以上〉